

決」皆が絶望していた。いっせいに手をつなぎ、いちばん近い人が、垂れ下がった高圧電線を握った。が幸か不幸か、送電はされていなかった。

死ぬことも許されなかったおとなたちは、必死で生きる道を模索した。残りの金全部を出し、男たちが満人に変装して情報を得、撫順行きの切符を手に入れてきた。

撫順には日本人が多く集まっているというのである。ようやく私たちはその撫順のレンガづくりの刑務所跡にたどりついた。そこはとりあえず平穏な地であったが、決して安住な地ではなかった。季節はすでに九月に入り、夜は霜すら降りた。夏物しか持たず、満足な物も食べられない生活で母乳も出ず。飢えと寒さで弟も妹も日に日に、やせ衰えていった。折もおりハシカが流行し、子どもたちをいっせいに襲った。幼い頃ハシカを済ませていた私は難を逃れたが、とき子も猛も例外ではなかった。暖めて栄養のある物を食べさせればかんとんに治るものなのに、とき子も猛も、ほんの一週間足らずで亡くなってしまった。

それから引揚げるまで、そして引揚げてからも、子ども

もながらに苦勞のあったことを忘れることはできない。戦争とは、兵隊だけのものではなく、その犠牲となるのは、まず弱い者からなのであることを一。

## 二か月がかりの帰国

愛知県 荒牧 実

私は昭和三年満鉄入社のため渡満。以来十八年の間、満鉄社員として家族四人で終戦をむかえたのである。敗戦によってわれわれ邦人は、主権のない国民としてあらゆる屈辱と苦難に耐え、くる日もくる日も生死の境をさま迷いながらついに二十一年七月十二日、名誉も地位も財も捨てて、一人につき持てるだけの着物と食料品、金は一千円だけ。貴金屬はいっさい持つことを許されず、丸裸同然の姿で引揚げることになったのである。

私の家族は、鞍山第三十八大隊に編入され、鞍山駅から、コロ島向け出発したのである。炎天下四十度の暑さの中で無蓋車に乗りこみ、身動きができないすし詰め

のあわれな旅立ちだった。その夜、錦州に到着、ここで乗船命令を待つために足どめをくい、一週間野宿で過ごすことになったのである。この間、私たちは心身くたくたに疲れはてて、先行き不安はつのるばかりだった。七月十八日、待望の乗船許可が出たというので、コロ島へ出発。その日の正午頃乗船所に到着した。これで故国にやっと帰れるという喜びが隊員の満面にあふれたのもつかの間、岸壁に浮かんでいる船は、故障で乗船はできないと知らされたのである。さらに情報によると、八路军が北京から奉天に向け山海関まで侵攻してきているというのである。万一、八路军が入国してくれば、この乗船は断念せねばならなくなる。一刻も早くこの地を離れなくてはならないから、故障船でもかまわない、乗船させて欲しいと強談判の末、乗船を許され、夜半までに乗船完了、離岸することができ、胸を撫でおろしたのである。

ところが、この船がはたして日本の港に着くか疑わしくもあり、船長に面会して話を聞いてみるようになったのである。

船長は日本人であることがわかり、この船は調子が悪

く、横浜からここまで一か月かかって入港したばかりだが、皆さんのために折り返し南風崎港に入港することを約束するという言葉に涙を流して喜んだ。

出港した翌日、しげに遭遇するや、船は風の吹くに任せて行きつ戻りつして、いつ目的港に着くことやら、不安に加え、半病人でしかも不なれな船の長旅ということで、発熱者が続出。まるでこの世の生き地獄の現出であった。

船は平常なら三日もすると入港できるものを、一か月も洋上をただよって八月二十一日にしか上陸できなかったのである。やっと故国の土を踏んで南風崎収容所で一夜を明かせば、故郷に帰れる筈だったわれわれに、又不運の知らせが舞こんできたのである。それはこの部隊に伝染病患者が出たというのである。又向こう一か月の隔離生活を甘受しなくてはならなくなった。毎朝、男女の別なく一列に並び、お尻を出して、つぎつぎに検便を受けることになったのである。恥も外聞もあつたものではなく、食事も芋の茎とわずかな米粒と水ばかりの雑炊一杯だけで空腹をいやすすべもなく、ほとんどが飢えと高

熱と戦いながらの長い苦闘生活だったのである。そうしてやっとこの苦しみから解放されて、この収容所を出て自由の身となったのは九月二十日だった。

### 禍福はあざなえる縄

兵庫県 松本和子

昭和十四年三月、小樽高女を卒業。北支、満州開拓の政策にそって、札幌鉄道局管区より三千人の募集があり、希望を持って、勇躍渡満を決意し、十二月三十日南小樽駅を出発しました。ハルビン満鉄鉄道局、北安駅勤務を命ぜられ、新京に到着したのが昭和十五年一月十日。例年はない酷寒で、零下四十度。北海道の寒さに馴れているとはいえ、それこそ凍るような思いでした。ハルビンの大和ホテルに一泊、翌日北安につきました。当時ハルビン、北安間は十時間かかりました。妹はハルビンの女学校で、満鉄社員家族寮。私はすることもなく、北安駅長宅に住込み女中で一年つとめました。その後、

関東軍第四軍軍司令部経理部勤務になりました。渡満してからの人生はめまぐるしく変わりました。終戦と同時に暴動にあたり強奪にあたり、雨期でしたので、身動きもできず、窓に板をはりつけ、玄関を釘づけにし、炊事もできず、缶詰ばかり食べて陽の目もみず、靴をはいたまま、今日は死のうか、明日は自決しようか、と生きた心地がしませんでした。毎日、軍人宿舎や官舎からの自決、放火で火の手が遠く上がり、恐ろしい毎日でした。北安駅上空にソ連機がきて、機銃掃射で、防空壕を狙い打ちしました。操縦士の顔が見えるほどの低空で、私どもも机の下に入って難を逃れました。黒河、孫呉から避難してきた親子三人も私どもの社宅に同居しました。それから十一月まで北安の社宅にいる間、三回もソ連軍兵士におそわれました。家をたたきこわして、六尺近い大男が五人も乱入し、父を裸にして、銃をつきつけ家宅搜索し大型トランク三個にぎっしりつめ、私の嫁入りのひじりめんの長襦袢をひろげてハラシヨールハラシヨールとさげんでいました。父の手拭いの巾の文字をみて、ドイツのゲルマンといって銃をつきつけ、母は手を